

ヤシパールの作品とカースト問題

石 田 英 明

ヤシパール Yaśpāl (1903~1976) は進歩主義文学を代表する作家であり、社会の変革に文学を通して働きかけようとした作家である。現実の諸相に深い興味を持ち続けたヤシパールが、カースト問題（就中、下層民やハリジャンの問題）をどう扱ったかを検討するのが本稿の目的である。

ヤシパールの小説（長編小説11編と短編小説17冊 206 編）のうち、本稿の目的に即して特に注目すべき作品は、長編では‘Manuṣya ke Rūp’ と ‘Meri Teri Uski Bāt’ であり、短編では ‘Manglā’, ‘Manu ki Lagām’, ‘Nyāy aur Danḍ’ の三編である。これら以外の作品についてはその都度触れることにして、以下に上記の作品の問題点を述べてみよう。

一、‘Manuṣya ke Rūp’ と ‘Manglā’

長編 ‘Manuṣya ke Rūp’ は 1949 年に発表された。主人公 Somā はパハール地方の Rājput カーストの若い未亡人で、嫁ぎ先での虐待に苦しんでいる。偶然知り合ったトラックの運転手 Dhansimh と駆落ちし、捕まる。この後二人は一時期を除いて離れ離れとなり、それぞれ波乱に満ちた人生を歩んだ末、悲劇的な再会をしたところで小説は終る。問題は Dhansimh である。彼は Somā と知り合った時、自分を Rājput カーストの者と称する。しかし、彼は実は Ghirth カーストの出身で、このカーストは本来この地方では、Brāhmaṇ, Rājput, Khatri, Sūd, Kāyasth 等の上位カーストの家で下男をするカーストである (p. 21)。彼もかつては下男をしていたのだが、逃げ出したのだった。現在彼はカーストを偽っているが、それを上位の者と対等になるための反逆行為と考えている (p. 21)。しかし、今だに独身であるのは、結婚の時にカーストを明かすのがいやだからである (p. 30)。結局、彼は Somā と正式の夫婦として暮らした時期を含め、カーストのことには最後まで触れない。と言うより、小説自体がこの後カースト問題から全く離れてしまう。その為作品の冒頭で Dhansimh にカースト意識を表明させたことの意味が判りづらくなっている。これは恐らく、題名が示すように、人生が様々に姿を変えていくことにより、人間がどこまで自由になれるかをヤシパールが文学的に実験したからで、実験を意識するあまり、カースト問題だけでなく、物語の

展開自体に現実とのずれが生じてしまったからである。(なお、この実験は最後の長編 ‘Merī Terī Uskī Bāt’ で一応の結論を出している。また、身分意識という点では、歴史小説 ‘Divyā’ の Pṛthuseṇa の方が判りやすい。奴隷 (Dāsa) 身分の者として Pṛthuseṇa も激しい反逆意識を表明しており、その意識が何らかの形で作品のその後の彼の人格を支配しているからである。唯、作品の背景が現代とは異っており、また、S. S. Gupt が指摘するように、Pṛthuseṇa の意識は現代の資本主義社会の人間のそれ¹⁾で、型としては ‘Jhūṭhā Sac’ の Jay Purī に近い。)

次に短編 ‘Manglā’ (1950)²⁾ を見てみよう。パハール地方の Brāhmaṇ の人妻 Manglā が嫁ぎ先の虐待に耐えかね、男と駆落ちして捕まるところまでの筋は ‘Manuṣya ke Rūp’ の Somā と殆ど同じである。違いは Manglā が Brāhmaṇ で、駆落ちの相手がハリジャンの作男であることである。大きな相違は捕まった後の展開で、Somā が幸運に恵まれたのに対し、Manglā は身の寄せ所がなく、やっと引き取ってくれた Mehtar (清掃人カースト) の男も、自分のカースト組織から脅迫され、Manglā を手離さねばならない。筋としては ‘Manglā’ の方に現実味があり、‘Manuṣya ke Rūp’ の安易さに対する反省ではなかったろうか。

二、‘Manu kī Lagām’ と ‘Nyāy aur Dand’

短編 ‘Manu kī Lagām’ (1950) は、これもパハール地方 (Almorā) の話で、この地方のハリジャン達が聖紐 (Janeū) 着用運動を始め上位カーストと対立した時、会議派の地区委員で Brāhmaṇ の Devdā が聖紐の無意味さを説いて運動を中止させるという話である。作品では Devdā の説得をハリジャン達が素直に聞き入れているが、実際には、例えば、Majumdār の報告³⁾ のように、上位カーストからの弾圧で運動を中止せざるを得なかったのであろう。Devdā は自分の少年時代の経験も踏まえて聖紐の無意味さを説いているが、そういう経験もなく、主に政治的角度から聖紐着用運動に意味付けしているハリジャン達に Devdā の論旨がどの程度有効であったかは疑問である⁴⁾。

‘Nyāy aur Dand’ (1958) も独立前のパハール地方に取材した短編で、ある村の Ḍūmnā (ハリジャン) の少年が、彼らに禁じられている金属製の食事用の盆を買った為、上位カーストの怒りを買ひ、家もろとも破壊されてしまうという話である。少年の買物に協力し、事件のきっかけとなった Brāhmaṇ の高校生は、心を痛めながらも、英植民地政府がこの種の問題に介入しない方針である上、ハリジャン自身が目覚めていない現状では致し方ないとしてこの問題を片付けている。この結末のせいで、焦点がカースト社会の苛酷さを単に提示するだけに留ってし

まい、作品の訴える力は弱くなった。

三、‘Meri Teri Uskī Bāt’

長編小説 ‘Meri Teri Uskī Bāt’ は、単行本としては1974年に刊行された。ヤシパール最後の長編であり、内容の充実ぶりはもとより、先にも述べたように作者の文学的実験の一つの完成という点でも重要な作品である。ヤシパールは文学の目的を社会の変革に置いているが、その一環として、女性の自立をめぐる問題を大きなテーマとしている。この作品もヒロイン Uṣā によってそのテーマを継承しているが、注目すべき点は、Uṣā の遍歴を通して、言わばインド社会の全体像を描こうとしたことである。筆者がヤシパールの文学的実験と呼んでいるのはこの点である。‘Manuṣya ke Rūp’ はこの実験が成功せず、Somā の人生は不自然な展開となり、結末も曖昧となった。‘Jhūṭhā Sac’ は分離独立時の動乱という歴史的事実があまりにも重く、また、後半部の Tārā の成功譚を中心とした展開にも作者の実験の余地は少なかったかと思われる。これに対し、Uṣā に際立っている点は、例えば、彼女の宗教との関り方である。彼女はキリスト教徒の家庭に生まれ育ったが、結婚の相手はヒンドゥーであり、後に政治運動に関る過程で回教徒として暮らすという歩み方をする。本稿はテーマが違うので、詳しく論じられないが、こういう Uṣā の創り方もやはり文学的実験の一部であると思われる。

カースト問題はヤシパール文学の主要なテーマではないが、この作品では比較的大きな位置を与えられており、その意味するところを考察することは重要である。まず、Uṣā の祖父 (Brāhmaṇ) がキリスト教に改宗した経緯が興味深い。この部分にヤシパールは前記の ‘Nyāy aur Dand’ をそっくりそのまま使っているのである。違いは Uṣā の祖父がこの事件を機にヒンドゥー社会に絶望し、キリスト教に改宗したことである。ヤシパールは多くの作品でヒンドゥー社会批判を行ってきたが、この作品でも批判は厳しく、後に Uṣā が Amarnāth と結婚しようとした時も、Uṣā の父はヒンドゥー社会を地獄に譬え、Uṣā が achūt (不可触民) の扱いを受けるだろうと語って反対している (pp. 360~363)。ところが、そのキリスト教徒の社会も、改宗前のカーストが何であったかということが今だに重要視されるという矛盾を抱えている。「インドではどんな宗教を信じようと、身分の上下、カースト差別は無くならない」と Uṣā の父は語っている (p. 175)。作中人物 Kim Grov のように、キリスト教徒にはハリジャン出身の者が多いせいであろうか。そういうキリスト教徒を扱った短編小説に ‘Bare Din kā Uphār’ (1941) と ‘Pāp kā Kīcar’ (1955) があるが、いずれもカースト問題のこの側面には触れてい

なかっただけに、この長編での扱い方が際立つのである。また、この作品では、回教徒の問題にも触れている。貧しい医学生 Razā は金持の娘と結婚するが、それはその娘の母が身分の低い Gūjar (p. 282 には Kasāb カーストとも書いてある) 出身である為、よい結婚が望めないとして、かねの力で貧しい Razā に押しつけられたのである。また、一般のヒンドゥーの登場人物についても、そのカーストに触れ、例えば、Amarnāth と Kohli の孫娘が仲良くすると、カーストが違いと騒がれたり、教師 Mathurāprasād の息子がカーストの縁故で就職できたりするなどの話を入れている。これらのカーストに関する言及は主に前半部のみに行われているが、これにより、作品の背景に幅と深みが増していることは確かである。言い換えれば、インド社会を総合的に描き出そうとする作者の狙いの幾分か、それぞれの宗教におけるカースト問題に触れることによって達成されているのである。

この作品に至るまでの作品にカースト問題への言及が少なかったのは、ヤシパールが中産階級に焦点を当てていたことの他に、彼がカースト問題を階級問題として捉えていたことも原因となっていた。例えば、'Manu ki Lagām' では、ハリジャン達が団結して聞えば階級闘争になると作中人物に語らせているし、'Kokla Dākait' (1954) でも、ハリジャンの女が売春を余儀なくされるのは経済のしくみに問題があるからとしている。'Meri Teri Uski Bāt' でも基本的にこの観点に変化はないが、単に思想の一端として取り上げるのではなく、社会を総合的に描く上での必須の要素の一つとしてこの問題を捉えたことが重要なのである。ここにヤシパールの一つの到達が示されているからである。

-
- 1) S. S. Gupta, *Yaśpāl aur Unkā 'Divya'*, Delhi, Aśok Prakāśan, 1972, p. 97.
 - 2) 括弧の数字は、その短編が収められている短編小説集の発行年を表わす。以下同じ。
 - 3) D. N. Majumdār, *Caste and Communication in an Indian village*, Bombay, Asia Publishing House, rep., 1962, pp. 76~77.
 - 4) Gopāl Upādhyāy の小説 'Ek Tukṛā Itihās' にも同じ運動への言及が見られるが、ここでもハリジャン達の動機は政治的である (p. 96)。

(浦和高校教諭)